

青砥藤編撰後集卷之五

東都

曲亭馬琴編述

二夫川の拾遺の下

ひめい 悲鳴と矢傷の鳥の母の俗とありと深し。されども善き終焉せんげん。
 のりんとて病苦を忍び喘々擲瀝巔を執ると死夫婦の望を洗死あつひ。
 核ことぬる谷底へ落れども。されども人ありける。扱まも亦辰廉念あつせんの執権
 北條時宗朝臣のぬる建治七年四月四日逝去せいきよ。時とき。三十四法ほつ。
 光寺道果とを稱し。嫡男貞時弱冠じやくわん。其妻とつたも。武ぶの
 依よりて。藤綱を用ひ。のの。又祖おは。今いま。弘安八年こうあん。
 先例せんれい。由よりて。青砥庄馬あおぞり。尉藤綱を巡歴使めぐり。補おひつ。守まもり。
 改か。道みちの。理り。非ひ。邪じや。正せい。を。監かん。定てい。寛かん。民みん。慈じ。辨べん。の。よよ。まま。るる。たた。くく。



3145

9

西面ある松州へ遣へし。青砥則五子と郎。浅羽十郎亦从下野の後有と
おと此度の中山道より發向。武彦上野。浅羽。武彦と巡歴。二月の十日
んや近江路へ入らる。佐木近江判官滿信が親音寺の派及まると
郎黨。武彦郡司がまがの陣所へ赴くと。十六日の未下刻。揚子江を
越る程。藤綱の山の半腹に馬を駐め。衆馬の左右に隨ふ。五子。浅羽を
んびりて。汝達より彼をよ。西のより教氣あり。願ふは今ついでに。途に刑罪の
のあつると。鞭を揚て指示と。その言をい。ま。え。ら。び。忽。然。は。て。谷。産。不
女の泣声。安んじ。藤綱。且。耳を澄。怪む。彼。辨。哭。声。の。復。て。且。憾。り。
是。必。冤。屈。を。祈。る。の。あ。じ。故。あ。る。あ。け。の。終。日。降。り。降。り。ど。時。あ。る。ぬ。
天の氣。及。と。ま。ま。と。あ。せ。ん。口。に。當。て。る。と。あ。り。備。懐。て。善。人。を。刑。せ。り。と。な。り。
天。怒。り。人。憾。む。と。則。史。傳。を。裁。る。亦。昔。唐。山。東。海。の。孝。婦。姑。女。の。考。を。讀。み。た。

寛治死せし早きと三年お及び祀祭が妻夫を果して深山忽地陥り
けん。この後異朝の故もの。その人。今。辨。哭。声。の。西。に。當。り。て。二。町。の。程。と。わ。じ。
索。て。ん。と。下。知。と。れ。の。五。子。浅。羽。を。と。り。て。ゆ。り。た。ま。支。去。り。が。目。し。て。立。
ゆ。り。殿。の。明。察。は。一。点。た。り。も。違。り。と。年。の。死。一。個。の。婦。人。西。に。あ。り。谷。産。落。て
ゆ。ひ。が。い。や。疲。勞。と。う。と。わ。け。て。こ。の。ま。も。と。あ。る。の。あ。じ。と。い。ふ。ゆ。り。
僕。亦。辛。く。は。枝。あ。げ。ま。つ。腰。お。著。る。准。依。の。苦。飲。ん。く。度。の。趣。を。同。い
ぬ。二。丈。川。の。村。長。は。番。屋。を。言。ふ。と。い。の。の。妻。の。名。は。六。と。呼。ぶ。ゆ。り。の。あ。り。
良。人。言。ふ。に。近。江。親。族。上。其。臺。馮。司。と。い。の。の。お。怨。ま。り。て。人。殺。の。あ。ん。な。せ
被。り。よ。り。て。言。ふ。只。今。小。野。の。衛。衛。あ。て。首。取。刻。と。と。作。り。良。人。が
最。期。の。や。う。と。も。ん。年。一。く。あ。る。野。と。多。の。お。お。と。清。ら。ん。と。あ。り。ひ。決。め
ま。や。く。こ。の。ま。も。立。於。の。故。と。と。この。五。六。日。の。九。穀。と。い。ふ。ま。も。



藤綱巡歴

去て途よ
訟と聴

か六

藤綱巡歴



善吉

善吉

善吉
寛柱
白刃
頭上
見く

さうでも憂^{うれ}せよ身^みの疲^{つか}勞^{らう}ま。あつども備^び外^{がわ}してこの谷^や。遠^{とほ}き。樹^き下^か登^{のぼ}り
あも身^みのあつらひ。志^{こころ}を果^はさばて。さあて空^{そら}くするん。意外^{いがい}の憾^{うらみ}。火^ひの原^{はら}を
断^つぐ。うらふ泣^{なみだ}叫^{こゑ}びてゆ。とまらせ。僕^{わが}等^らい。勅^{しやく}り慰^{なぐさ}め。汝^{なんぢ}をささうせよ。
青砥^{あおぞ}公^{こう}巡^{めぐ}歴^{れき}して今^{いま}この山^{やま}を越^こゆ。あは。秋^{あき}新^{あたら}わ。みづう。稟^{らい}せ。必^{かならず}聽^きゆ。ん。と。愛^{あい}ま
殿^{との}を候^{まち}ま。れ。と。あ。も。も。も。教^{しやく}諭^ん。と。木^き葉^は小^{せう}草^{そう}を刈^{かり}布^ぬつ。平^{ひら}る。石^{いし}の上^{のうへ}。件^{けん}の奴^{やつ}人^{にん}
と安^{やす}坐^ます。さう。ぬ。て。ゆ。喘^{あせ}。稟^{らい}。と。ま。藤^{ふじ}綱^{つな}。と。ま。と。つ。と。ゆ。て。鞍^{くら}。と。拍^うて。嘆^{なげ}
唱^{なげ}。吁^あ。その夫^{つま}。と。ま。の婦^{つま}。あり。こ。の。怨^{うらみ}。よ。と。ま。も。あ。は。は。五^い十^じ子^し七^{しち}郎^{らう}。速^{すみ}。小^{せう}野^やへ
い。ゆ。て。ま。が。郡^{ぐん}司^し。の。對^{たい}面^{めん}。予^まが。辭^{ことば}。を。信^{まこと}。と。傳^{つた}。へ。若^わ。吉^{きち}。と。や。ん。が。死^し刑^{けい}。を。禁^さよ。
これ。い。ま。ま。件^{けん}の婦^{つま}。人^{にん}。の。事^{こと}。の。顛^{てん}末^{まつ}。と。ま。向^{むか}。て。跟^お。より。も。ん。ど。ま。ろ。を。ゆ。ら。や。
と。し。と。い。ま。ま。五^い十^じ子^し。唯^{ただ}。と。夜^よ。も。あ。は。と。山^{やま}。の。西^{にし}。へ。葛^{くわ}。直^{ちく}。子^し。小^{せう}野^や。の。投^な。と。
ま。り。あ。は。は。や。三^{さん}町^{ちやう}。許^こ。中^{ちゆう}。て。凸^{とつ}。き。如^{ごと}。う。前^{まへ}。面^{めん}。を。信^{まこと}。と。ま。令^{しん}。と。ま。せ。は。彼^{かれ}。を。郡^{ぐん}司^し

主^ま従^{じゆう}る。と。ん。と。お。ぼ。れ。が。或^{ある}。の。床^{とこ}机^ぎ。子^こ尻^{しり}。を。う。け。或^{ある}。の。桿^{かん}。棒^{ぼう}。と。り。く。威^い。と。示^し。群^{ぐん}
集^{しゆ}。の。老^{らう}弱^{じやく}。數^{すう}。百^{ひやく}。人^{にん}。行^{かう}。馬^ば。の。四^し。方^{ほう}。を。圍^{かこ}。繞^り。て。さ。ま。が。ら。指^{さし}。麻^あ。竹^{ちく}。葦^{あし}。の。如^{ごと}。大^{だい}刀^{たう}。の。の
使^し。男^{なん}。の。切^き。鞘^{せう}。被^ひ。さ。り。刀^{たう}。を。引^ひ。提^ひ。て。罪^{つみ}。人^{にん}。の。背^せ。後^ご。小^{せう}立^{りつ}。玉^{ぎよ}。の。散^ち。ま。り。氷^{こおり}。の。刃^{やいば}。を。
晃^{きら}。と。閃^{ひら}。して。既^{すで}。に。首^{くび}。を。刎^き。んと。さ。る。ま。で。五^い十^じ子^し。吐^つ。嗟^そ。と。ま。折^お。く。扇^{あふ}。と。共^{とも}。い
こ。を。揚^あ。げ。ま。の。ぐん^{ぐん}。司^し。の。お。ぼ。れ。う。さん。深^{ふか}。会^{かい}。殿^{てん}。の。作^{しやく}。ふ。う。て。青^{あお}。砥^ぞ。左^さ。邊^へ。の。尉^{じゆう}。と。不
ま。ま。り。北^{きた}。條^{じょう}。殿^{てん}。の。嚴^{げん}。令^{れい}。の。ぞ。その。罪^{つみ}。人^{にん}。を。殺^{ころ}。と。ま。り。等^ら。一^{いつ}。等^{とう}。と。叫^{こゑ}。び。禁^さ。め。
か。て。ぞ。ま。著^{ちやく}。よ。け。當^{あた}。下^げ。多^た。賀^が。郡^{ぐん}。司^し。の。ホ。の。僅^{わずか}。小^{せう}。青^{あお}。砥^ぞ。の。二^に。字^じ。を。叫^{こゑ}。更^{さら}。い。
北^{きた}。條^{じょう}。殿^{てん}。の。嚴^{げん}。令^{れい}。と。叫^{こゑ}。て。且^{かつ}。驚^{おど}。れ。且^{かつ}。怪^{あや}。し。律^{りつ}。の。虚^{うつ}。實^{じつ}。と。ま。り。和^わ。れ。もの。ま。り。
大^{だい}刀^{たう}。の。の。武^ぶ。士^し。を。退^{たい}。り。して。又^{また}。お。仇^あ。く。ま。り。若^わ。吉^{きち}。を。殺^{ころ}。と。ま。り。主^ま。従^{じゆう}。頭^{とう}。を。殺^{ころ}。す。
五^い十^じ子^し。の。侯^{こう}。様^{やう}。は。聚^あ。ひ。り。里^{さと}。人^{にん}。ホ。の。維^い。藤^{ふじ}。綱^{つな}。を。ま。り。と。ま。り。人^{にん}。孰^た。り。若^わ。吉^{きち}。を
憐^{あは}。れ。ま。り。今^{いま}。五^い十^じ子^し。が。叫^{こゑ}。を。叫^{こゑ}。と。一^{いつ}。散^{さん}。動^{どう}。す。遂^{つい}。に。れ。ども。一^{いつ}。條^{じょう}。を。路^{みち}。を。

つづみあつてを空くもるのりる。かちも又のりる。さるるは胸中
 度とまひて果つて半响をう。瘡りもはたのりる。さるるは胸中
 もも遺憾けい人の背に懸ひて。さるるも青砥をえんとて。且て後徳の
 浅羽十郎亦西へ入て。かちを扶掖し。その勇の真先は馬を進め。さるる後らう
 身よけは。ひたすのり。さるる刑戮を禁するは。さるる郡司の外面は
 立寄奉り。迎ひに青砥。則ち後者亦も道次を残り。さるる五十子浅羽亦僅
 十餘人を。おて行馬。門馬を。兼居。肉と。さるる進入る。床ルを上坐。さるる
 郡司。お對ひ。佐木。の郎黨。亦賀郡司。さるる法場。よめて。刑罪を
 仍も職分。たし。困る。さるる編網。殆ど。威佩。さるる。郡司の首を。低牙
 不肖。ゆ。とも。某。佐。木。の一族。して。兩郡。を。管。ま。さるる。賞罰。を。入。よ。ま。な。れ。ど
 一りて。廷尉。未臨。の。り。返。告。さるる。さるる。さるる。遠く。迎。を。ま。な。れ。ど。失。教。の。罪。を

知る。宥免。を。蒙。る。幸。甚。一。と。さるる。情。砥。扇。と。り。直。後。徳。が
 忙。この。知。る。さるる。不審。お。ま。な。ん。が。此。度。下。官。北。條。殿。の。令。命。を。受
 那。巡。歴。さるる。字。獲。さるる。郡司。さるる。政。道。の。理。非。を。同。民。の。愁。訴。を
 用。人。為。さるる。小。向。堀。滅。巔。を。裁。り。お。悞。さるる。谷。は。陥。り。泣。叫。が。婦。人。あり。
 後。者。之。技。わ。び。は。縁。由。と。り。さるる。刑。戮。せ。さるる。罪。人。さるる。言。言。が。妻
 あり。良。人。と。寛。枉。を。の。り。さるる。首。を。刎。らるる。と。傳。言。最。期。の。や。さるる。ん。ま
 母。この。心。を。ま。な。れ。ど。身。の。疲。勞。眼。眩。と。忽。ち。谷。は。滾。滾。と。登。る。と
 心の。も。と。を。と。遂。に。中。途。に。さるる。と。怒。の。り。の。恨。み。の。舞。哭。ゆ。と。り。
 左。の。も。さ。ら。や。づ。十。子。七。郎。と。り。さるる。言。言。が。必。死。を。禁。め。六。が。愁。訴。の。途。を。を
 さるる。さるる。道。理。を。稱。お。れ。さるる。彼。の。の。り。さるる。さるる。五十子。浅。羽。の。さるる
 左。右。の。も。取。り。さるる。の。内。へ。入。さるる。さるる。良。人。と。面。を。あ。り。さるる。淺。羽。は

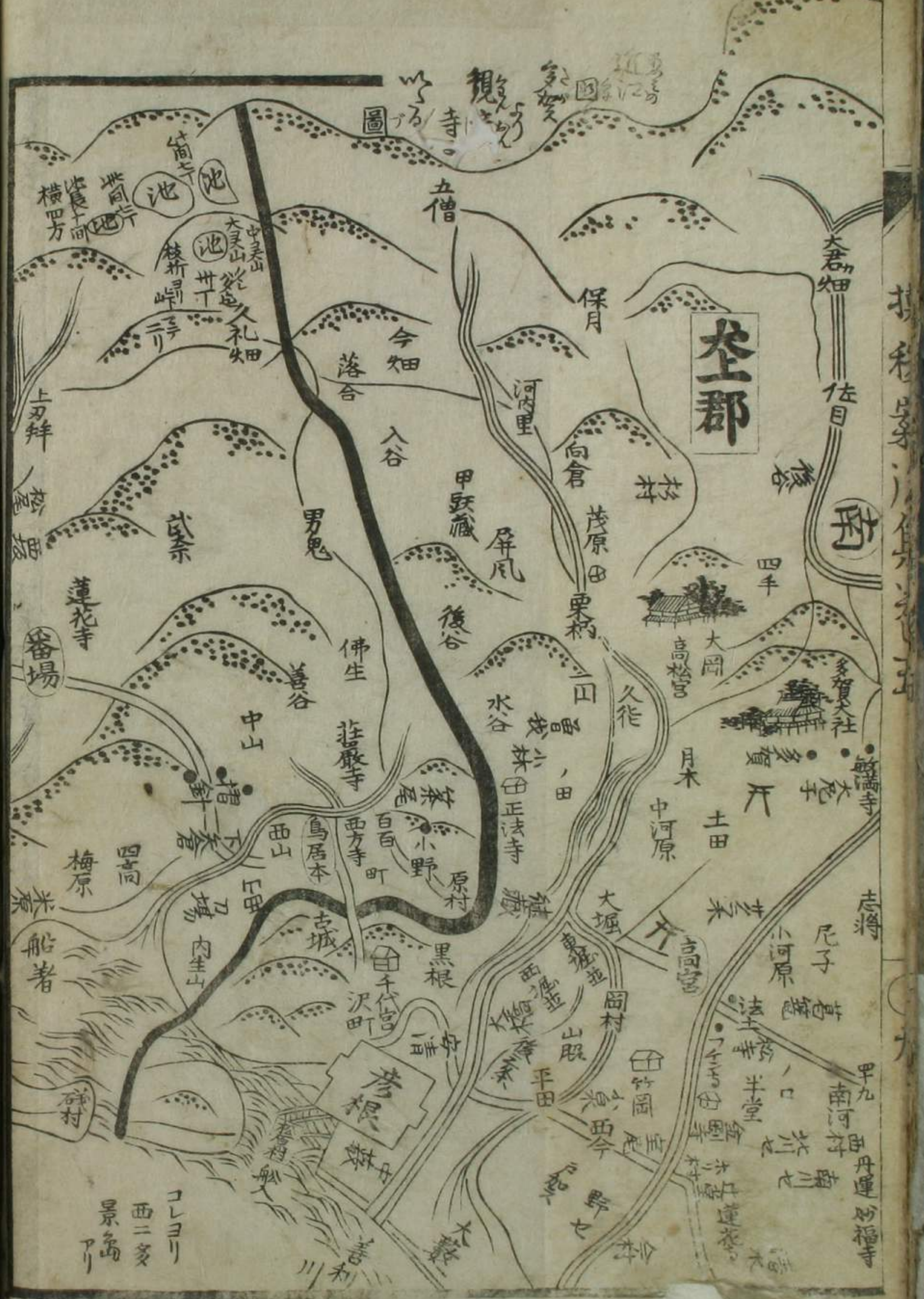
井上源一
 五

形容^{かたち}衆^{しゆ}る^る哀^{あはれ}こと^{こと}ん^ん苦^{くる}と^と消^きる^る世^よの^の命^{いのち}の^のあ^あら^らり^り寒^{さむ}く^く乃^{なり}
 又^{また}下^{した}び^び頭^{かぶ}も^もち^ちめ^めり^りと^と青^{あお}砥^ぢの^の君^{きみ}の^の助^{すけ}を^をた^たす^すの^の清^{きよ}を^をた^たす^すわ^わが^が深^{ふか}水^{みづ}は
 ある^{ある}龜^{かめ}も^もの^のた^たの^のひ^ひと^とた^た夫婦^{ふうふ}が^が幸^{さい}生^{せい}ん^んも^も死^しん^んも^も測^{そく}志^しれ^れぬ^ぬ生^{せい}死^し乃^{なり}海^{うみ}
 深^{ふか}た^た敷^敷と^と嬉^{うれ}し^しと^とつ^つま^ま涙^{なみだ}の^の潮^{うしほ}境^{さかい}満^み干^{かん}み^みれ^れぬ^ぬ松^{まつ}心^{こころ}自^{みづか}眉^{まゆ}こ^この^のあ^あも
 若^{わか}く^くは^はお^おほ^ほし^しひ^ひと^とつ^つま^まい^いの^の社^{やしろ}も^もを^をき^きよ^よと^とす^す郡^{ぐん}司^しの^のあ^あが^が涙^{なみだ}で^で途^{みち}を
 青^{あお}砥^ぢを^を辨^わべ^べと^とな^なす^すは^は快^たく^くは^は堪^たら^らず^ずて^て眼^{まなこ}を^を腫^はれ^れし^しこの^{この}を^をえ^える^る夫^{おつと}の^の罪^{つみ}は^は連^{つら}坐^ざ
 せ^せれ^れぬ^ぬを^を幸^{さい}と^とせ^せて^て身^みを^を憚^{おそ}る^る貴^{たか}人^{ひと}を^をお^おと^とす^すれ^れど^ど何^{なに}の^のさ^さか^かし^しも^も言^{こと}言^{こと}既^{すで}お
 首^{くび}伏^ふく^く人^{ひと}教^{おし}の^の罪^{つみ}定^{さだ}り^りて^て自^{みづか}業^{ごう}自^{みづか}得^{とく}と^とま^まり^りて^てや^やと^と鳴^な呼^こべ^べと^と吐^つき^きま^ます^す
 藤^{ふじ}網^{あみ}を^をく^くら^らら^ら笑^{わら}ひ^ひ郡^{ぐん}司^しの^の辞^{ことば}を^をう^うら^らも^も学^{まな}ぶ^ぶ人^{ひと}の^の命^{いのち}と^と手^て引^ひの^の石^{いし}と^と何^{なに}
 と^とる^と車^{くるま}と^とせ^せん^ん鞆^{たもと}向^{むか}呵^あ責^{せき}は^はる^るた^たば^ばに^にて^て堂^{どう}は^は屋^やを^をの^の世^よは^はみ^みと^とま^まり^りひ^ひか^かし^し
 抑^{おさ}り^り言^{こと}言^{こと}が^が堂^{どう}は^は血^ちを^を踏^ふると^と彼^かが^が危^{あや}の^の卷^{まき}石^{いし}血^ちを^を踏^ふると^と犯^{とが}人^{ひと}

あ^あん^んと^と疑^{うたが}は^は禮^{らい}責^{せき}の^の後^{のち}彼^かを^をや^やく^く罪^{つみ}お^お伏^ふせ^せし^しの^のあ^あら^らり^りと^と同^{どう}に^に罪^{つみ}を^を犯^{とが}す^す
 怒^{いか}を^をお^おめ^め現^{げん}宣^{せん}み^み如^{ごと}く^くの^の青^{あお}砥^ぢか^から^らひ^ひて^てま^まつ^つと^とた^たれ^れ私^{わが}主^{ぬし}が^が獄^{ごく}形^{かたち}履^{ぞうり}は^は佩^ひ
 たり^り言^{こと}言^{こと}實^{じつ}は^は高^{たか}丸^{まる}節^{ぶし}と^と丑^{うし}と^と申^{まを}んと^と砍^き殺^{ころ}す^すその^{その}血^ちを^をう^うて^て衣^い裳^{せう}は^はか^から^らひ^ひ或^{ある}は^は領^{りやう}前^{ぜん}
 或^{ある}は^は袖^{そで}を^を堂^{どう}へ^へも^も踏^ふま^ます^すその^{その}あ^あら^らび^びに^にて^て裾^{すそ}の^のこ^この^の血^ちを^を踏^ふと^と疑^{うたが}は^はべ^べ加^か之^を
 梓^{あざ}川^{がわ}より^{より}二^{ふた}三^{さん}町^{ちやう}を^をた^たす^すその^{その}向^{むか}は^は番^{ばん}場^ばの^の款^かあり^り大^{おほ}約^{やく}路^ろ程^{ぢやう}二^{ふた}十^{じゆ}町^{ちやう}も^もあ^ある^るま^まじ^じ
 彼^から^ら草^{くさ}履^{ぞうり}を^を踏^ふと^と鮮^{あざ}血^ち彼^かが^が宿^{しゆく}所^{ところ}へ^へゆ^ゆる^るや^やで^で草^{くさ}履^{ぞうり}の^のう^うら^らら^ら流^{なが}る^るま^まじ^じ
 卷^{まき}石^{いし}の^のあ^あら^らび^びを^を疑^{うたが}は^はべ^べ願^{ねが}は^はま^まの^の言^{こと}言^{こと}を^を竊^{ひそ}か^かに^に恨^{うら}む^むる^るの^のあ^あら^らり^り
 梓^{あざ}川^{がわ}の^のあ^あら^らび^びを^を男^{おとこ}女^{めづめ}命^{いのち}と^と墮^おせ^せ夜^よ言^{こと}言^{こと}を^を疑^{うたが}は^はべ^べ河^か原^{はら}を^をた^たす^す
 えて^{えて}浅^あら^らり^りの^の較^{かく}計^{けい}を^を草^{くさ}履^{ぞうり}の^の背^せに^に血^ちを^を浸^ひして^{して}卷^{まき}石^{いし}へ^へ印^{いん}すると^と言^{こと}言^{こと}を^を疑^{うたが}は^はべ^べ
 夜^よ言^{こと}言^{こと}を^を疑^{うたが}は^はべ^べと^と此^{こゝ}彼^か暗^{あん}令^{れい}と^とな^なす^す堂^{どう}は^は血^ちを^を踏^ふの^のあ^あら^らび^びを^を疑^{うたが}は^はべ^べ
 工^{くわう}の^のあ^あら^らび^びを^を卷^{まき}石^{いし}血^ちを^を印^{いん}と^と理^りを^をあ^あら^らび^びと^とあ^あら^らび^びに^に九^く罪^{ざい}の^の疑^{うたが}は^はべ^べの^の仇^{あだ}を^をた^たす^す

教はるるなり。その夜の夜に、（夜に） 彼村の巫とて、（巫） 往來の
 時刻を考へ、又言を常は帶る。服夾の刀の、（服夾の刀） 彼が家よありとあり。其の
 中をよして、（中をよして） 又馮司が折る。而も併考あり。十、八、九、その情を推察
 する。そのあつた。威を逞して、（威を逞して） 言を口と、（言を口と） 并呵責杖罰その夜は
 して、（して） 罪人を、（罪人を） 公道といふ。況んや死骸とありて、（況んや死骸とありて） 昌九郎又と決ま
 して、（して） 推量の海は、（推量の海は） あらむ。郡司の決断ころ、（郡司の決断ころ） 結れども、（結れども） あり
 ます。この御徒、（この御徒） 外は、（外は） 又ありとも、（又ありとも） 言を、（言を） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。その言を、（その言を） 外は、（外は） 又ありとも、（又ありとも） 言を、（言を） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。則ち、（則ち） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。せられて、（せられて） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。この言を、（この言を） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。

獲はるるなり。御過失とありて、馮司の長とよれつ。言を、（言を） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。人亦、（人亦） 馮司が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。憤るる、（憤るる） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。悼ある、（悼ある） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。諸ひ、（諸ひ） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。郡司、（郡司） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。馮司、（馮司） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。ある、（ある） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。巧や、（巧や） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。仲由、（仲由） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。所謂、（所謂） 昌九郎が妻とありしと、（昌九郎が妻とありしと） 言を却媚く、（言を却媚く） あり
 たり。



對ひ籠編ちり青あねも。この知あての練へじ。後日の沙汰よるんれ。
 集の中あ言音ホが親族あつらひあるのど。召牛しとりのま。
 行馬の母よりふま。守り其知を聚合るりの中。言音ホが親族あつらひ。
 巡歴使の任せめよ。まや。ま。ま。と。
 左右人をおたひて行馬の中ふま。入り。小人の野上の旅店松山とあつらひ。
 化雅ある。白眉の長あり。此度のも。
 とて相摸より。ま。ま。と。名音も。果と。額。青砥。
 白眉。糸。し。於。言音。不慮の枉難。日。未。の。こと。苦惱。あ。つら。ひ。籠。
 お。お。ま。ま。ま。ま。ま。言。罪。あ。つら。ひ。天。日。光。を。ん。の。は。あ。ん。又。罪。あ。つら。ひ。
 妻子の為。よ。松。の。赦。の。つ。六。の。つ。疲。勞。の。お。汝。ホ。を。ま。を。て。歸。り。

可憐は保難を加。再の沙汰を等。ま。ま。と。
 唯とむ。り。禁。の。ひ。る。感。涙。に。乾。ぬ。袖。と。又。湿。る。砂。を。つ。入。ま。て。言。ひ。
 ま。ま。に。側。より。只。伏。お。が。む。拜。む。妻。の。つ。と。も。よ。ま。ま。の。あ。つら。ひ。ま。ま。と。
 ま。ま。と。釋。ぬ。索。の。佛。の。爪。の。糸。今。中。劍。の。山。吹。か。連。堂。へ。ゆ。ま。ま。と。
 青砥。の。ま。て。郡。司。の。對。ひ。の。れ。已。ぬ。より。群。集。の。老。弱。を。ま。ま。と。
 抱。こ。さ。動。も。ま。ま。の。聲。を。ま。ま。と。の。あ。つら。ひ。お。ま。ま。と。
 ま。ま。と。上。其。堂。司。の。ま。ま。と。の。ま。ま。と。の。ま。ま。と。の。ま。ま。と。の。ま。ま。と。
 中へ突入るんれ。ま。ま。と。の。ま。ま。と。の。ま。ま。と。の。ま。ま。と。の。ま。ま。と。
 ま。ま。と。の。ま。ま。と。の。ま。ま。と。の。ま。ま。と。の。ま。ま。と。の。ま。ま。と。
 渠。停。と。下。知。と。れ。の。清。羽。を。子。ま。ま。と。の。鬼。て。夫。を。不。索。と。か。け。り。

〇二
 〇三

邊也ハ果て果て更よハ所と云ハ此彼面をわかつて眼を圓くし涙を
細めて衆を跪くと云ふ事として里人ホハ多も声を揚一度は嗚と云ひ
る後夕陽西へ傾き群鴉叢林に鳴るを青森の郡司を御導すと云
尋如の陣所へ赴くと云ふ六白眉と云ふ直は牙の暇を少し馬司也
若吉示ハ浅羽十郎を相副て郡司が殿共より立立し床ルと云ふ馬
跨り赤黒の芒萌歩小野の細道右の寺の柳の煙を細く行はせ
兩度の行執移てある松桶多雲を投てをいさぬかて藤綱ハその落且
多賀と云ふ観音寺城のへ赴く後ハ佐々木の家兼數十人郊外へ出
迎へ陸続して観音寺の城中へ懐くを近江判官滿信ハ礼服を脱て城
門の望に迎へ花きの向小清待し某近ごろ小室の事と云ふ
由と云ふといふも路次の款待その意を任せと云ふ幾の悲承らんといふ

威儀下く四協して春平ゆて万氏王に武徳浴せり。さうのいふ生を
貪り。死を空に驕るまに足る上城志らば或々氏を虐て私庫を富利は
去りて奸智は秋。竊に相害とするの。時中も多む下りて有能
北條殿の命を京此度巡歴の第一番ハ守護の以道邪正を鑑し我
所を因て言を勸め悪を懲してよむる寛民を救ん為る。さうん
昨藤綱ハ捕賊頭を執ると途途は如此の婦人あり。執所の越す於
ゆつて小野術術へ馬を走下。當家の郎黨多雲郡司は對面して
罪人若吉が死刑と云ふ更ハ新人馬司邊也ホと縛てこれを獄舎に
繋し。九の陣のこの判官信下知せれる秋郡司がさうに任され
しる。因ハ滿信眉根を寄せると向々やもあは帝堯の聖なるも
身はさして下官の死せむ某大國を領せむ。細瑣のるハ郎

道長史記 卷之八 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

團子なる子烈女のり。あつねりて今一言の失りて不平の地はなる。せん
勧め要を懲りし寛民を救ひたる。當家の主従よをさる。あつねりて
命を京で。藤倉死せし。藤綱が當職る。且くこふ。藤綱と。藤の
邪正を。藤綱。の。私曲ある。藤の郡司と。藤の。藤の。藤の。
家謀と。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
飲ひ村井田八郎は。野兵十人。副て。賀郡司と。野人。野人。野人。野人。
おて。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
藤信のその日青砥は。郷食。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
配膳して。叮嚀は。勸む。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
飯の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
今この。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。

あつねりて。湯漬の外。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
八丈信濃の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
某素より。節儉と。宗と。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
常子元又。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
布の直垂。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
人への。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
よく。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
あつねりて。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
ども。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
罪人。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。
川より。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。

藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。藤の。

南無。後佐のまはしよさ大座子と一階降りて... 七郎。浅羽十郎ホの左あり。その餘佐ホの家... 青砥まづ。馮司遲也ホ對ひていぬ。夜梓川のより... 絶てゆらるるけし。杖を打植の外るとも。どひあまらう...

面貌の孔子み似て何尚之顔延之ホの... 被さる一御の中もあやう。り彼軀の別人あて... 昌九郎と。丑と教して寛枉と賤さとも又... 乱るると。猿喻せ。馮司の胸を刺さ。如く。あ病... 音砥左辺を信とて。おをれ言言。汝の又何の... 梓川原を過り。ると。同バ言言。汝を握ら... 見てゆひた。そのまの五年。みおよ小人... 腹まえ。為野上の旅宿を竊み。お松山の... 髪と異なる。おを息の婦人の情あて。さう... 関人と。あひて申の比。及よ宿所を半が中...

素袍に官服有り。馬は、あまて木を落す方の牙禍のどき祥貝輪の王の
著明は比へ。北より南へつゞきんして果さむけの北の黒く南の赤
こまの獄舎のつゞきは紫ま。牙のありをひ鮮んととる鮮がた
のりこそ如此とされてゆ。この向は孫細の机案を破と拍その後判
事ハ一を破してしまふ。その二をまらざる危夫易小三坎と水止。又北に
三離を馬と南と南南方の馬をまて北より南へ返とたの坎は後ひ
離よりたて三まおほく春く。又離を中女と。坎を中男と。馬は左よ
向ひて水は湿水と左をく馬を右に。あつもの水水りつ。裂て二條を
流々たる氷と。同字をて共よ。二水の香。二ある馬と。つとれ
とたの。是則馬の字あり。秋川と領せ。枕の則。此の臺。此の則上方を
上臺の象。不稱ひ。西の日輪の昌の字。人馬あり。この水中。洗ぬと後。ん

祥川系を過り下り。馮司昌九郎亦は謀られて。若き獄舎は紫あれ馮司の
又裸襖を脱ぎざる祥。此を五年に布よ。若きが。めくのどた後をを令。
この春六が又後んへの禍のよ。一朝のふあ。あつものた。馮司ハ
當夜昌九郎亦と示一あり。竊は男女を破殺して。その首を懸し。
昌九郎又が夜裳を軀に被せ。庭の石よ血ととめて。若き夜輝るあん。
明白は夢えあが。首伏せざる。と責問ハ馮司ハ駭く。気をさく。あつ
青砥公の仕儀とも覚えゆ。このも。これのあつ。豫て休むとあり。
前執権宝光寺殿鶴岡八幡宮通夜。あひる。若き。若き。若き。若き。
枕方お立あつ。れ。道直して世をなく保んと。若き。孫細を。若き。
せよ。と示現と蒙りあひ。若き。若き。若き。若き。若き。若き。若き。若き。
あつ。と。延尉と。受あつ。物の実相る。諭。如夢幻。若き。若き。若き。若き。

莫夫友

組粟食雀と逐と養ふ。帝嗣子定む。殷の武丁の養ふ。賢臣傳説と奉用ひ。周文王と養ふ。九十九の齡と老れ。餘待書礼経不裁と所を奉不違あり。馬の耳小風る。決さるふ。終る。彼昌九郎と丑と挿挿て。中らざる。元と并て上臺馮司の。青砥の又と。日來苦心。る。ての生。育の。子。と。惜。く。財。と。擲。産。を。破。り。く。そ。り。

艱苦小迫るとも。彼が令お。物あ。白眉が。あ。ま。は。あ。り。首。直。と。進。じ。て。吾。を。密。に。や。と。の。ま。は。し。散。の。ど。く。お。せ。た。そ。の。既。首。伏。て。人。數。の。罪。定。り。え。ん。が。助。命。は。ら。稱。ひ。は。し。但。獄。全。く。赴。た。て。碗。飯。と。饋。る。と。の。妻。子。の。乞。ふ。と。と。て。や。ら。この。の。次。祥。さん。ら。さ。ら。彼。方。さ。ら。く。媚。ま。が。言。さ。ら。う。や。首。は。あ。ら。う。も。首。と。繞。る。と。の。や。あ。ら。う。と。と。う。あ。ら。う。の。憑。ま。て。廻。身。の。路。費。の。金。錢。残。り。ま。く。齎。ら。某。の。日。乃。黃。昏。不。安。賀。殿。へ。ま。ら。れ。と。く。搦。滅。巔。の。半。腹。ま。く。三。個。の。賊。本。撞。見。て。吾。を。為。し。令。の。綱。と。と。ひ。金。と。奪。れ。た。れ。その。存。存。の。箇。様。と。と。す。て。匿。さ。ら。は。え。あ。ら。う。と。と。ひ。こ。ま。は。す。も。あ。ら。う。と。と。忽。然。と。声。と。あり。立。ま。た。不。知。己。あ。ら。う。と。と。ひ。も。あ。ら。う。

これ信濃路を巡歴して。孤務の祝が館止宿。上下の神社へ詣りて。其年
ころ男女二人甲斐峯のかゝりてあり。その為俸間道と聞て人をおも
ものといえり。このあはれ捕てその本歴を問がや。と云ひ。這奴の色
惑ひつ。さるふとさるふと云ひ。して。さるふといふ世に。今更おのへ女をお
する。俸の旅客が面影此馮司お似け。どや。あつて男の昌九郎。女も
丑うもあつて。女五七人の親兵衛と。又昌九郎と丑とを認まる。二丈
川村の庄客をおて案内と。大凡信濃より甲斐より。相摸や。その客店を
穿鑿し。先より先へ跡を跟て。詳は往方と問求め。搦捕て。さる。這奴
ホが往方の謙余る。ど。とて世の浮浪人。身の経管。お赴くもの多し。
繁華の地を。と。京る。ど。れが謙余る。ど。と。い。さ。さ。浅羽十郎
ころを。つて。親兵衛五七人を。お。つ。二丈川へ。赴。昌九郎。ホ。と。う。認。ま。る。

馮司が鄰家の庄客を案内と。信濃路を投て。走。め。た。り。却。返。
昌九郎。お。丑。ホ。の。い。ぬ。夜。梓。川。原。あ。て。又。馮。司。お。別。れ。し。り。お。丑。を。馬。お。
系。竹。輿。よ。系。又。あ。つ。と。た。の。赤。糸。う。の。も。い。さ。が。て。夜。を。日。は。續。て。さ。る。夜。お。
六十余里と。四。日。お。さ。り。て。下。孤。務。中。で。あ。ま。り。甲。斐。國。へ。入。る。と。た。間。道。多。て。
潜。ぶ。は。便。い。け。し。領。お。丑。を。い。さ。せ。も。この。時。お。丑。の。長。途。は。疲。勞。ま。そ。の。
夜。寒。熱。往。来。し。お。持。死。ね。ぐ。爰。と。い。昌。九。郎。の。驚。き。患。ひ。て。己。と。を。認。む。
孤。務。の。客。店。に。逗留。さ。る。程。は。八。日。を。つ。ひ。て。お。丑。が。病。著。あ。つ。て。ね。丑。を。
つ。と。あ。て。お。の。外。と。い。え。と。その。日。午。後。て。昌。九。郎。お。丑。を。お。て。潜。中。に。宿。を。出。
秋。の。宮。へ。詣。け。彼。ホ。何。の。を。祈。り。けん。神。明。の。を。不。言。の。人。に。福。を。降。し。
あ。つ。た。この。時。浅。羽。十。郎。の。頭。梨。の。名。の。茶。店。あ。て。下。の。孤。務。の。客。店。へ。
夫婦。と。な。り。た。旅。客。逗留。し。て。夜。を。つ。て。殊。更。は。赤。糸。の。さ。が。二。丈。の。里。人。を。

五

青板の窓の櫛

三月廿月

其角



去の編既... 狂歴して... 閑と補ふ...

ゆるい櫛の図説

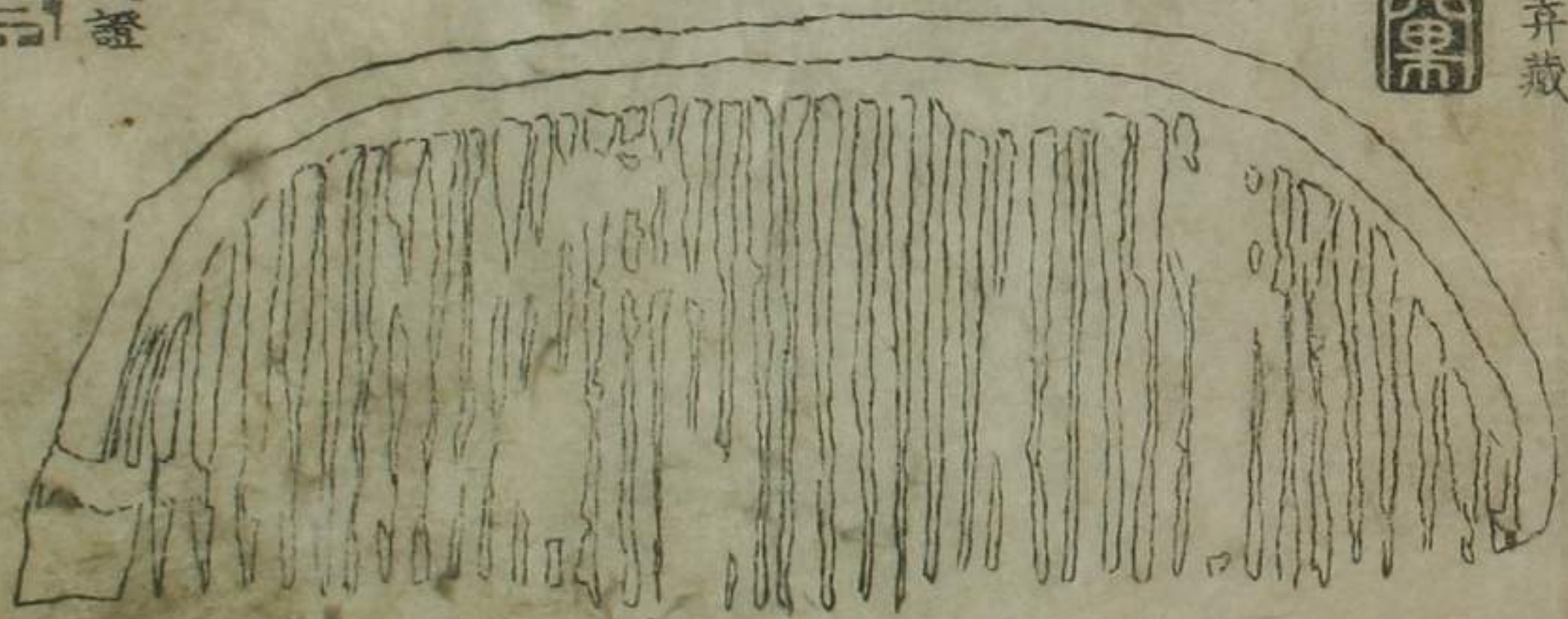
櫛と梳枇の惣名あり... 及和名久之といふ... 美中て雲脂と除去の用と...

平安 吉季 卷 奔 藏



水牛

厚



東都 雷水堂 改 證



先よきくで喘々する復昌九郎亦が秋の宮下り。下向するふゆのふり。
 案内の三人指して渠こそ昌九郎お忍るれと告る状にて件の夫婦の駭き
 騒ぎて持場の雄は異なる路を求めて逃ると云ふ。浅羽十郎殿兵下りて
 矢急よお丑を引捕て犇と縛こそその牙の昌九郎を追せ鬼つ。頂髪を
 引廻て仰さぬふり倒せ臥る。又を扱て浅羽が向腔破ると云ふを跳
 踰て踏落し。押て些とも動せと忽地索をわけりりる。案下某生再脱
 青砥藤綱の昌九郎と丑分往方と索で搦捕てぬまると浅羽十郎亦を信
 濃路へ遣り。又いぬる日搦減巖を白眉の長が合致奪ひとり。このふ
 三賊と捕んと。五十子七郎お物熟する兵士三四人を下り副て毎日お彼此へ出
 せ。五十子ホの姿を變貌を變へ。送は暗号を定り。二町三町引別れて
 大堀川よりある。醒井柏原の驛路を徘徊する。六七日ふる。ともそれ

と云ふの奴を。有一日五十子七郎のひらり搦減巖と越る。後よきくは
 ぬり。松の下お庭を布て野ふせりのを兒やあ。ん。お。ご。ろ。く。く。と。さ
 とのこ三人を對ひつ酒を飲て。何より近くある。お山風を吹かされて
 酒の香芬かと鼻入りし。七郎お尋。這奴ホが今飲酒の茶蘆漉片白の
 類はあ。べ。その氣を嗅。ま。こ。ま。家上の諸向。ら。じ。這奴が。さ。ま。奴。く。ま。の
 旨酒と喫する。不良の流を獲。ま。あ。あ。ば。や。ま。づ。探。て。ん。と。あ。ひ。て。葉。を
 と。ら。笑。つ。め。し。あ。と。い。ひ。く。て。席の端へ尻を。ひ。假藤氏。い。ひ。う。り。つ。
 には流と流と。ま。で。假ホが飲酒と。こ。眼。三。平。介。ある。と。の。が。五。音。備。の。生。か。て
 人の。ま。酒。を。嗜。り。ま。る。あ。け。の。山。崎。と。越。ま。て。二。滴。も。咽。と。澤。さ。だ。物。不。死
 おる。ふ。今。は。達。が。酒。の。り。ま。る。奴。ん。ま。る。は。た。と。條。る。わ。ぶ。一。二。碗。け。與。へ
 る。と。い。ハ。野。伏。ホ。ら。ん。笑。ひ。つ。れ。も。人。も。嗜。む。と。い。ハ。わ。ら。せ。酒。中。の。餓。鬼

むの。おや一酒はさうな。け飲一わせんそ一碗をよらんが又十子と
 半飲て舌うち鳴じ「義濃路の養老の名を」おひて酒の佳とてあはれ
 かの渚白のぬがうらぶ。は達しうもあかひて。かた驕者を極めぬ人
 志じしものと熟す。間がぬら掉て。いそぐはるこのわん物うだりさ
 傾多と輻くころを放さぬが七郎碎るおひし。腰を擡りて一枚の圓
 金を閃りと投す。こまの當坐の酒價より。か睨く相譚も。実は一樹の蔭はて
 一河の流を汲酒も。佐生の縁とて。くもたの物つすくもさるぬ。い
 え本盜賊めて。そ流と近江を宿と。彼慈悲が子孫まんと果放さる
 又黨もひ。いしよさ。枝わぶ志を焚らんと。とどまらぬあはれを
 この損減巔とて。毎月お越るりのうら。は達さうもさる。その名を
 むひ秘と化すもの。いひよる。野伏ホの碎は紛ま。呵とくらひ。

さめて馬もあはる。いしよ荒平彼と霜平と。呼までこの年本佐流
 吹あてあると。た駄賃をとり。又あると。た刃刺して。五七年を過おけ。と
 独活の本本。薺力のみ。薺劍の終て。あはれ。志じ。さるもの。いしよ。其
 本も終は。住びて。近丁。この山下へ。菓をかえ。さるもの。いしよ。日俄頃本
 人ふたの。まて。金野懐中せ。老人とて。お埋休て。ら。いしよ。勸を。け。ら。
 ニッガッ。を。け。さ。て。十日あ。ま。り。飲暮と。酒の因縁件の如。と。舌も。さ。る。は。
 二人。と。い。と。海。あ。り。う。ふ。お。と。る。と。又。十。子。楚。と。吹。果。て。衝。と。牙。を。起。て。両。個。の。
 賊と。左。右。へ。丁。と。蹴。倒。し。天。小。屋。に。身。の。罪。を。さ。ら。う。と。さ。る。自。業。自。得。
 青砥殿の命と。稟て。汝。木。を。擗。捕。る。又。十。子。七。郎。を。ま。さ。る。や。と。罵。ら。れ。て。
 荒平霜平。くら。驚。勢。の。身。を。起。し。側。よ。よ。せ。る。堅。木。の。杖。を。閃。く。
 打んと。さ。る。又。十。子。の。飛。を。の。如。く。受。る。が。潜。り。脱。二。條。の。杖。を。奪。ひ。

あつて肩腰の嫌ひる。打るやまてひとりく小廻起して索を被
暗号の笛を吹く程に且くして夥兵二人あゝの如く聚令へく七郎則
猝の越を後ちりしてまの癖者と親音寺へおてめれたる。そのさせむ
兵ホの嘆賞して荒平霜平を引立。勇進て去去けり。かくて五十子七郎ハ
彼草賊ホが支黨の隠まてするとのやとて山路を彼此とちりえんぐり。
番場醒井の駅迄さうら。梓川を三度ほろく梓材の向ひる。由と
り田畠をゆく程よこの地方ハ梓川の上あて川水溢まで田おちらひ。路
まゝさぬろけり時ハ二月もくや程まかりけり。今今ハ国月あまどど
事さうく冷きあつて凍解ど。まど御ぬ田ハさく水うて群居る雁と今も
寒し。おしもの榛林ハ鳥さうらびて。やうくと啼く。あ彼何をんて求食
あやとそのりとうへあてんまが。年紀ハ三十あまらふして。旅ちり世一個ろ

武士深田の氷さうら碎まて斬まて。二ツの頭を只今引上うとあし
くて男の頭へ目もめけど女の頭を膝ハ抱えて。潜然とははけり。五十子ハ
この形勢よひめさうらあれば件の武士あうら射ひ。旅客それハ和
駈の妻もや。仇を索て執るとる。さうら。不便宜のりまうり。けれハ巡歴
使の雑色よ。五十子七郎とのり。のいぬる。この川の上あて男女を砍殺し。
二夫の村長言を程する。奸民馮司昌九郎ホが一件のり。おより。後後
今ハ親音寺の城中お坐とる。と猝の顛末をさうら。さうら。と。いハ。旅客形
を更め原未その名張ゆる。五十子。さうら。と。世ハ。某ハ。鎌倉のり。二階
堂権頭ガ家隸。小井。輕元。二とのり。の。又。推量の。と。ま。この。の。ハ。妻。二階。が
首級。さうら。いと。和。り。の。の。この。ハ。當。初。化。粧。扱。の。遊。君。の。り。一。が。
あやと迎ら。年来を経てゆひ。さ。さうら。ふ。この。婦。人。幼。稚。と。然。句。光。梶。お

奪ひ去られて化移坂へ賣られしを親同胞の名はさすて舊里にても
 楚六志に護身囊を近江に多々の社の神符あり」と父の母と
 誓ひて云云と写し居る。脐帯をのこして索を環会にせし
 ありしところ歎く公標痛く筑麻の温泉浴をて生君の牙の膿を
 ぬぐり妻を携ててと近江路へ入るその日不箇様とのふりて馬
 逐夫は空蟬を掠奪し彼世と索を相識する。言言といふ
 のふのいぬもるんも於妻の往方とまはるて。さうふ夜を
 天昭て空の梓川を斬殺されし男女あり。さうゆてこれをさす。そ乃
 死骸は首のひきと女のさつが妻のたて空蟬をのこりけり。此
 公体ひて立ゆるとさる途に日來空蟬が牙を放てその日までも項
 掛る護身囊を拾ひた疑念ぬびてさる發りて幸の板を團の字に
 祈んとさるとも素より潜りあるが主君の名はさすて新護りあるが
 こまごまは隠止つ。又言を宿所を索てつがうと馬を咬え相譚敵のふ
 るさびやとて次の日辛くと索當隣る人彼を問は如此ものさうりく
 とがが殿へ搦捕し家女房のさとのふその女房とさるゆりて移る
 竟はさる宿所を病む妻の存亡ん定めば鎌倉へかへれどとて
 十四日彼世と惑ひあれてけいさるばも深田の水小関らん。二の頸を引
 あげえれば。正しく妻空蟬。正しく妻を奪ひ去る。馬逐夫の首級あり
 氷の中ありしひき目未の種をも朽もせと爛もせ後へ吾妹とさる
 どの解ぬ疑ひと申すよりて教るが追薦これよまをさあじ。このふ
 又十子うら直取同今和殿の物ありて符節を合さるるのこそあれ
 親者さるさるの。律あつら分好るん。さうとさるばる。さる二の

奪ひ去られて化移坂へ賣られしを親同胞の名はさすて舊里にても
 楚六志に護身囊を近江に多々の社の神符あり」と父の母と
 誓ひて云云と写し居る。脐帯をのこして索を環会にせし
 ありしところ歎く公標痛く筑麻の温泉浴をて生君の牙の膿を
 ぬぐり妻を携ててと近江路へ入るその日不箇様とのふりて馬
 逐夫は空蟬を掠奪し彼世と索を相識する。言言といふ
 のふのいぬもるんも於妻の往方とまはるて。さうふ夜を
 天昭て空の梓川を斬殺されし男女あり。さうゆてこれをさす。そ乃
 死骸は首のひきと女のさつが妻のたて空蟬をのこりけり。此
 公体ひて立ゆるとさる途に日來空蟬が牙を放てその日までも項
 掛る護身囊を拾ひた疑念ぬびてさる發りて幸の板を團の字に
 祈んとさるとも素より潜りあるが主君の名はさすて新護りあるが
 こまごまは隠止つ。又言を宿所を索てつがうと馬を咬え相譚敵のふ
 るさびやとて次の日辛くと索當隣る人彼を問は如此ものさうりく
 とがが殿へ搦捕し家女房のさとのふその女房とさるゆりて移る
 竟はさる宿所を病む妻の存亡ん定めば鎌倉へかへれどとて
 十四日彼世と惑ひあれてけいさるばも深田の水小関らん。二の頸を引
 あげえれば。正しく妻空蟬。正しく妻を奪ひ去る。馬逐夫の首級あり
 氷の中ありしひき目未の種をも朽もせと爛もせ後へ吾妹とさる
 どの解ぬ疑ひと申すよりて教るが追薦これよまをさあじ。このふ
 又十子うら直取同今和殿の物ありて符節を合さるるのこそあれ
 親者さるさるの。律あつら分好るん。さうとさるばる。さる二の

汝の希まがうはしる。務太郎との男児あり。推し付赤坂の。主の家を
逐電して外又さき債を負い。かくて數の年を経て。刃が離別せり。日暮きり
宿所を。汝も彼務太郎。お環。今が後。遂はその往方と。さるべし。亦是二天の
里人ホよ。抑務太郎。その年紀。今の。を。面影の。り。と。同。が
近也。現。子。務太郎。三十余。年。あり。ぬ。面。色。黒。く。眼。光。
鼻。の。ひ。ら。た。髭。鬚。青。く。髪。と。薄。く。て。眼。下。ホ。た。た。り。る。黒。子。あり。又。左。の
耳。の。裏。ホ。刀。瘡。の。跡。あり。と。お。お。え。い。ひ。か。と。の。同。又。子。浅。羽。首。桶。ニ。を。携
きて。簀。子。の。端。不。圖。う。青。砥。扇。と。う。直。一。汝。ホ。この。世。の。い。ひ。お。後。と
く。子。とも。う。と。面。と。あ。の。さ。る。え。と。と。下。お。い。は。子。浅。羽。首
桶。の。蓋。を。左。右。を。取。り。ま。は。せ。則。空。蟬。と。馬。逐。夫。が。首。級。あり。近。也。の。子
務。太。郎。が。頭。と。と。け。ま。は。か。地。ホ。気。色。変。り。て。果。々。と。半。晌。を。り。と。同。く

うもみりけり。青砥小膝を立直。奸賊ともいひ。馮司の。後
梓川を。密棍。よ。勾。引。猿。轡。を。被。れ。女子。と。刀。不。砍。殺。又。昌。九。郎。の
とも。不。件。の。女子。と。引。搦。ま。り。荒。男。も。砍。殺。して。ま。密。念。増。長。して。二。の
頭。を。川。へ。投。棄。昌。九。郎。と。刃。が。衣。裳。を。男。女。の。懸。に。被。り。ま。ま。を。逐。り
因果。靦。面。脱。ま。反。密。報。殺。して。乃。路。の。女子。の。馮。司。が。女。見。空。蟬。之。勾。引。え
棍。の。刃。が。見。務。太。郎。の。れ。と。夜。の。れ。送。ま。は。た。父。の。女。見。を。む。づ。り。殺
子。の。又。妻。の。兄。を。殺。して。恩。義。の。た。た。り。族。の。言。を。反。推。倒。推。倒。の。ど。く。村。長。お
る。か。や。と。較。計。毒。悪。は。不。せ。い。不。及。昌。九。郎。ホ。が。首。伏。ふ。う。て。當。夜。の。と。を
う。ま。り。ぬ。嚮。の。は。浅。羽。十。郎。と。遣。して。昌。九。郎。刃。の。り。下。下。流。坊。を。を。を
生。拘。り。又。搦。滅。巔。を。端。め。馮。司。相。彈。と。白。眉。が。金。と。奪。ひ。さ。り。し。る
野。伏。荒。平。瀧。平。も。捕。獲。し。且。空。蟬。ホ。が。頭。と。由。と。呼。做。する。深。田。の

中へ流し入つて水戸川に居る。腐肉爛せど良人え二よりあげられ。持太郎が
頭りろた。懸前ふ聚合と。昭々皇天その結局と。他は。奇哉空輝が
乳名。蚊ユ虫と。呼ば。ユ虫ハ。則と。めむ。穴單と。流る。た。空と。の。輝と。
る。疲ふ。不單。穴の。狐は。ある。親。毒虫。山。踏。水。没。世。持太郎。が。名。も。
虚。水。人。馬。隔。昌。字。を。分。日。輪。二。偽。陽。の。陰。謀。悉。比。向。その。心。
あり。つて。も。正。愛。る。と。る。空。蟬。ハ。舊。里。の。名。も。と。る。い。は。愛。
の。神。符。と。騎。帶。ふ。書。つ。け。る。筆。蹟。と。よ。と。小。説。と。索。ん。と。良。人。え。二。は。
携。れ。舊。里。近。く。あ。つ。と。も。あ。い。ど。め。黄。泉。の。旅。妻。の。仇。人。の。妻。が。人。婿。の。
元。二。も。と。あり。斬。し。て。日。と。夜。二。の。頭。と。と。り。あ。つ。る。田。圃。の。字。由。名。詮。
自。性。六。々。則。陰。の。正。数。婦。德。愛。と。未。嘗。有。の。賢。妻。夫。ハ。あ。つ。も。三。世。

の。良。人。祖。父。の。泉。善。又。の。良。人。の。子。小。孫。と。積。善。の。言。と。い。は。る。
虚。を。よ。あ。げ。今。ぞ。釋。る。冤。枉。と。言。ふ。ま。あ。つ。る。書。を。そ。の。縛。を。釋。除。せ。
坪。の。あ。つ。る。小。引。居。る。昌。九。郎。也。五。菟。平。霜。平。と。略。せ。て。馮。司。達。也。ホ。小。
え。せ。ん。ハ。残。忍。無。款。の。上。臺。る。い。も。方。才。推。け。腸。斷。し。て。今。ハ。半。句。も。匿。
ゆ。と。梓。川。の。る。い。と。年。末。の。隱。悪。と。も。あ。つ。る。首。伏。し。又。その。夜。さ。り。
と。言。ふ。あ。つ。る。河。系。派。め。つ。る。草。履。の。う。と。血。は。浸。し。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。
巻。石。塗。せ。る。榻。痕。巖。平。菟。平。霜。平。を。相。彈。人。と。て。白。眉。が。金。を。奪。ひ。
と。言。ふ。と。言。ふ。郡。司。小。贈。り。つ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。
運。也。也。脱。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。
い。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。
奸。計。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。と。言。ふ。

徳田 昌九郎

罪藉不定。現悪人の為不福。吾人の福。お六と悪自眉等が
飲ひの比におおる。その中お言言荒平菊平とをく研げ。又
つとら。同渡。青砥。又あれを研り。吾言。そのものどもを成
らる。と惺惚。又。さ。け。の。し。も。の。性。小。人。鎌。倉。より。ある。物。あ。れ。を
う。ま。り。と。中。寝。寤。の。里。の。間。より。ある。開。洋。と。ある。け。る。癖。者。亦。中
ぬ。て。ゆ。と。夜。ま。う。せ。ば。その。あ。ん。這。奴。亦。の。近。ろ。信。濃。より。近。江。越。え。ろ。う
ま。る。野。伏。の。悪。棍。あり。曩。其。信。濃。路。を。汝。と。苦。め。後。其。堀。減。巖。を
白。眉。と。悩。し。る。天。罰。人。罰。の。を。脱。ま。ん。夫。代。の。妻。を。犯。し。こ。ま。取。奪。あ。り
是。且。ろ。と。せ。ば。竊。ち。と。言。言。教。え。ん。ま。る。の。の。岡。九。郎。あり。又。飢。渴。を
言。言。救。ま。り。死。子。が。再。生。の。恩。を。言。言。良。人。の。命。を。盗。む。密。夫。は。た。し。し
又。は。密。夫。の。妻。と。あ。り。て。犯。と。せ。ば。あ。ら。ば。ど。て。兄。を。害。し。更。夫。の。恩。を

捕。て。言。言。教。え。ん。世。の。の。丑。あり。か。れ。が。の。奸。夫。毒。婦。その。罪。た。ら。り
宜。梓。川。お。言。言。首。と。言。言。又。年。末。言。言。田。園。を。横。領。と。村。長。又。は。推。奪。
お。の。裁。度。お。ろ。く。村。長。を。止。め。ら。る。却。言。言。娼。婦。あ。ひ。て。と。く。毒。惡。を
ま。り。刺。荒。平。菊。平。を。相。彈。て。白。眉。が。金。を。奪。ひ。し。う。これ。を。て。郡。司。と
誘。ひ。速。言。言。教。え。ん。と。言。言。の。の。馮。司。の。の。罪。と。て。死。刑。は。當。り
宜。荒。平。菊。平。と。共。堀。減。巖。小。言。言。又。年。末。野。の。夫。と。う。え。ん。く。
改。滅。路。あり。日。原。の。主。人。良。人。和。五。郎。が。病。著。と。い。せ。く。あ。ひ。て。女。見。丑。と。密
殺。し。丑。の。密。夫。を。誘。引。し。う。母。の。和。五。郎。が。夜。裏。金。錢。を。盗。む。と。り。く。
逐。電。し。更。言。言。小。類。る。よ。ら。び。て。丑。と。岡。九。郎。と。奸。通。と。を。あ。り。つ。も。
禁。め。ど。懲。ら。ん。丑。が。離。別。せ。れ。と。死。の。ろ。共。言。言。馮。司。が。家。を。ま。り。て。逐。言
馮。司。が。後。妻。と。あ。り。お。の。の。為。夫。任。じ。る。言。言。を。逐。ら。り。の。の。逃。也。あり。

莫夫又...

かれの死刑に當るといふも。昔者が孝順の孤を贖はるゝ一筆とてして
追放へ。若太郎の素より積徳の癖有るれども。既し馮司昌九郎亦不
教されんが罪科その沙汰よるべし。又坂田犬上兩郡を管領とするは
是と欲あるに苞苴と貪りて。其のれを教えんとせしもの郡司あり。
宜し祈禱を言せて生涯内弁せし。就中昔者が入とある。孝子之
義男之形状一点の瑕瑾なり。あるのるるに昔者只廢る家業を
與えんと。年外苦むして貯積する百五十金と惜する。返也と若太郎
丑ホに分年六五之仁に形て彼ホと絶交して後の禍を禦する智之丑を
昌九郎あはして。んめつぎに依る罪あるに獄舎は教され怨言の如く
礼の。薄命と嘆くと死を決する勇あり。その五常不稱れと如の如く。
賢中へ又至善言あるもの。よりくその徳約を門閥は表すと彼此と

あゝとむむ。且當座の儼美と砂金二百兩と大小の刀を賜ふ。
夫婦中々徳をかこめて里人を教諭せよ。与救自眉亦よくその人を
知つて言次助け。義も仗て財を惜むと公標又賞と。井輕元二。
妻空蟬の衣をとりて且く百とよるといふも。可もあ。不可もは。この隨意
謙念へぬるとを許すもの。是併執權北條殿の恩澤ふく守佐未
氏が言政の乃が所を。衆皆ころゆと。明断既し度了。木村井田
八郎亦之り。鬼て郡司が腰刀を奪ひとり。素袍烏帽子を剥とりて二室の
中へ閉籠まへ。五十子浅羽の懸兵亦昌九郎。又馮司昌九郎。返也。荒平薄平
と。堀越嶺梓川原ニテ。妙おもて首を刎その首級とを折るの
う。是より先野兵兩三人返也。傳とと死除る。城外へ追放せ。昔者
牙あまる。国因心の志。返也。娘返也。子を教。家を表ひ。道

路よ迷ひ申ささんとどろび今更痛いけほど私小救へる由あるは被物
を賜りてお六と熱白眉の縁とも藤網儀伝を拜謝しつ二夫川村改り
けりといふして件の村を牛打村と改めふる二夫川舊八入川に改め又
お丑が夫のり言者と昌九郎清濁を慶賀し入と二夫と音相似れば
好事の者文字をうえて二と唱牛打と改めしるお丑を憎むる者お
延也の彼此を呻吟つ身のおれ野るれお梓川へ身を投りて兩夜未
彼河原又鬼の泣声ゆえいづ言者いづ哀を法華堂又塔婆を
建又毎月お経を讀んでお六人の苦境を吊問ふるおやもなれ
あつたこれらの都鄙お六が芳名いとさくありなり
けれは夫婦ハ二夫川村ありといとも彼岐岬のお六櫛のせむ世の人觀て
繁昌せり。福のこころを。お六が腹の子らと夥奉りうら言者

これが成長の後家子お二夫の村長を嗣せ二男の子と熱養ひたりて野
上の客店或相續させ三男お六を母の姓菅環氏を嗣せしお六の
村水の村長ありつ四男お六の母お六の姓森村氏を嗣し母が舊里へ家を造りて
酒造と閑居しお六は親友の酒を嗜むその名をくわたりおけり。お六が言者
お六と老後は岐岬の櫛店へ隠居し。未だお六婿を娶て店のおじと熱白眉の
長お六子に「妻の先とてお六ありつ。五十年の非を去りて六挺里の生活
疎とてお六らの家産を棄て顔刺しをちて言者寺へ退隱し生涯のひ
とまかせしとぞ。

玄同陳人批しつて人の性の善悪をわねるも深きと云はれは是を洗て
うららざるりのあり。お六の聖人も親ひはじといふ。凡人の親とて死る
その子の賢るるんは誠度裁さる。お六も不肖者の必賢者を

画工 葛飾北齋

浄書

鈴木武筭

刷刷

補像
刊字

櫻木藤吉
木村嘉兵衛

○著作堂新編目次

平林堂書肆刊行

小説快事八犬傳

北齋画

近

刊

音砥藤網摸稜案

同画

前集五卷 出未
後集五卷 出未
続集五卷 近刊

鎮西八郎椿説弓張月

同画

全部 五篇
凡九卷

款討裏見葛葉

北齋画

五冊

石言遺響

北馬画

五冊

○馬琴画さん扇

江戸神田通鍋町柏屋半藏并大坂心斎橋筋河内屋太助方より

江戸田所町書肆

鶴屋

金

助

文化九年壬申冬十二月吉日發販

本所松坂町書肆

平林庄五郎

文化九年壬申冬十二月吉日發販

